

伊野川から忠別川までの地名②

前回は、掲載地図の伊納駅の「駅名起源」は、対岸の掲載地図のイノペツ(公武河川名は伊野川)に由来して、石狩川右岸には、それに該当するアイヌ語地名はないことを指摘した。

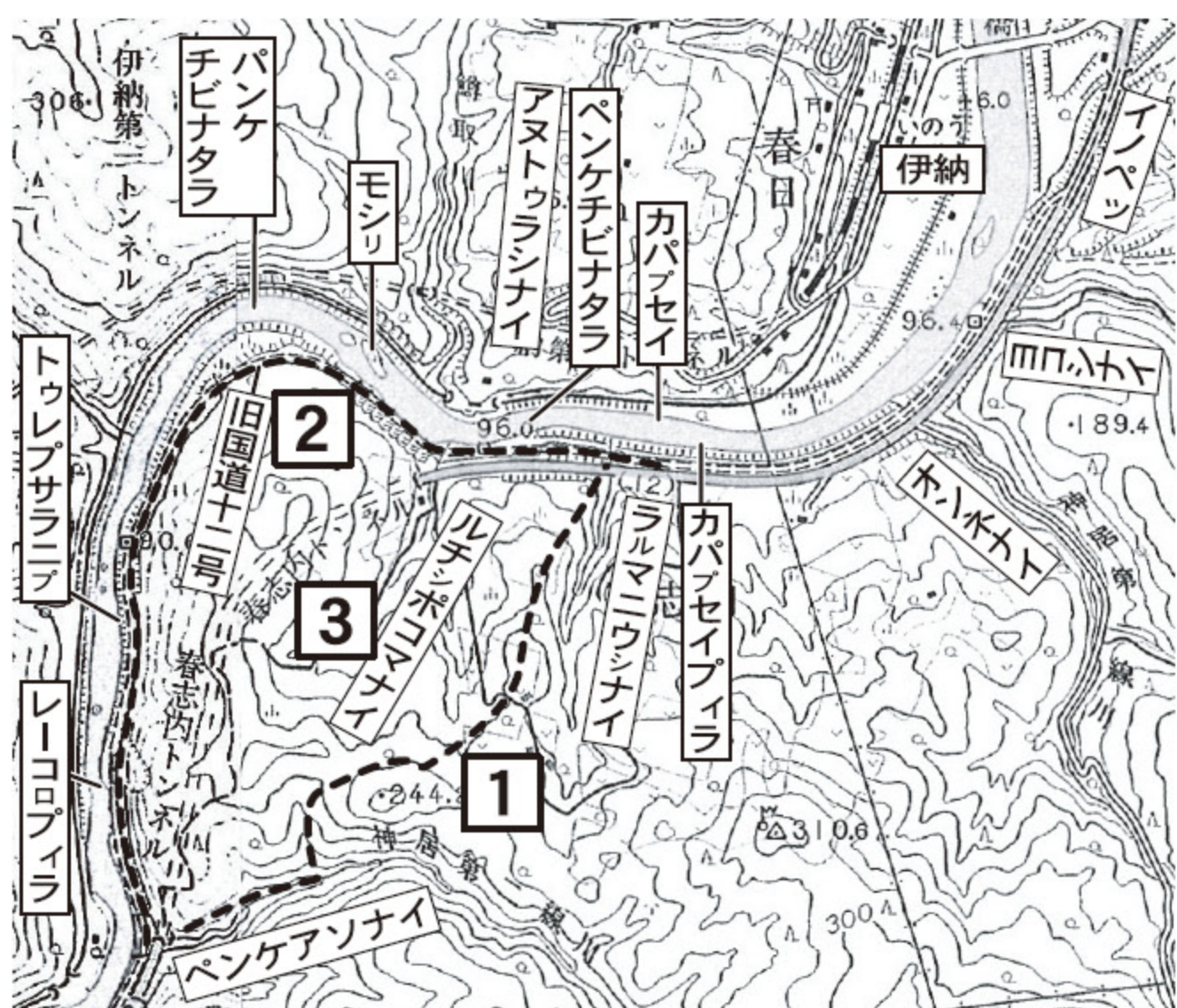
伊納駅の地名解を最初に正しく伝えたのは、明治四十二年に発刊された、『大日本地名辞書続編』である。ただし、読み方は、「イノ」である。少し長いが引用する。

伊納―石狩川の右岸、鉄道停車場の所在地にして、鷹栖村に属す。西神居古潭駅を距る六哩、東旭川駅を距る亦六哩。大川(註―石狩川)の岸には、多少田圃も開けたり。蝦夷語地名解曰く、「イノ・ペツ」(Inopet = Inu-o-pet)は、漁人の仮小屋ある川の義。今、アイヌ略してイノと云

ふ。イヌ又シ、イヌン・ペツの名、処々にあり、皆同じ。「イノ・ペツ」は、伊納停車場の対岸に於いて、石狩川に注ぐ小川にして、神居村に属す。右に見たように、永田方正の『北海道

蝦夷語地名解』を参照し、イノ・ペツは、伊納停車場の石狩川対岸の小川で、当時の神居村に属していると明記している。

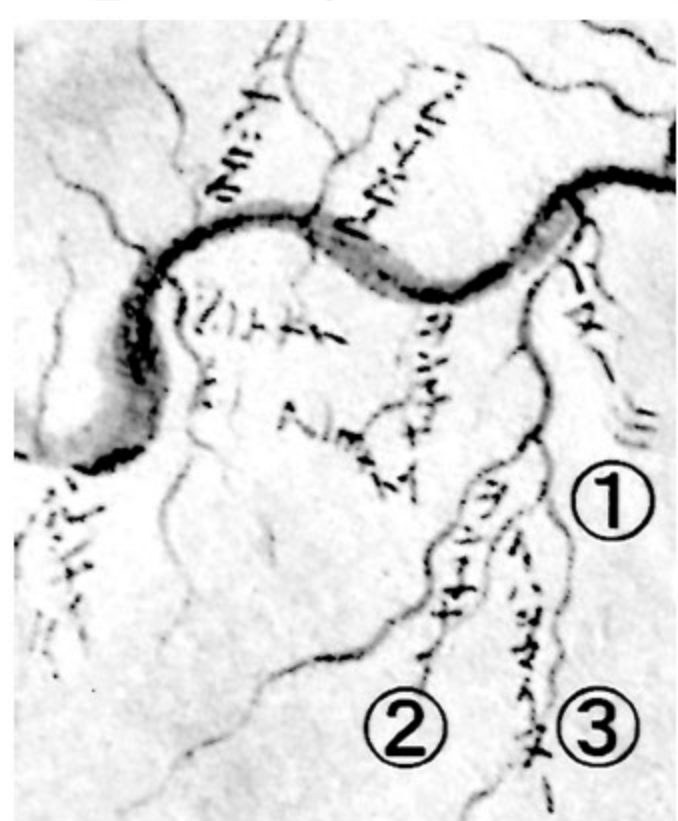
ところが、大正七年発刊の磯部精一著『北海道地名解』では、永田方正『北海道蝦夷語地名解』と、吉田東伍『大日本地名辞書』を参考にしたと序言に書きながらも、現在の「伊野川」を、「伊納」として地名解をし、その上、「伊の澤」については、「伊納澤を省略したる名称なら



んとま
で書いて
いる。

また、

昭和三十
五年に、
知里真志
保が、「伊



伝・間宮林蔵『蝦夷図』

野川』の地名解で、川名の見出しを誤って「伊納」とした上で、次のように記述した。

「伊納」(いのう)―アイヌは昔から「イノ」(ino)とだけ言って、それに「ペツ」(pet川)も「ナイ」(nax沢)もつけなかったという。語原は「イロナイ」(i-roo-nay 熊の・足跡・多い・沢)から「イロ・ナイ」となり、「イノ・ナイ」と転じ、下部を省略して「イノ」となったのかもしれない。

このように、「伊納駅」が誕生したことにより、掲載地図のイノ・ペツの漢字河川名を「伊納」とする誤用例も見られるようになった。

昭和五十九年、山田秀三は、『北海道の地名』で、「伊納・伊野―旭川市西部の地名。名のもとになったらしい伊野川は石狩川南岸、国鉄伊納駅は、北岸にある。松浦図と同氏十勝日誌はエヌ・ブトと書いた。「エヌ(川)の川口」の意。また

同氏石狩日誌の「イヌ又シナイもこの処らしい」と記述した上で、永田地名解と知里地名解を紹介し、以下、次のようにまとめている。

前記した松浦氏の「エヌ・ブト、イヌ又シナイ」と聞いた音から考えると、あるいは単純に「イヌン」(inu 狩漁期の仮小屋)と呼んでいて、それが「エヌ」とか「イノ」とか訛ったらしきも思える。

さて、「写真の伝・間宮林蔵『蝦夷図』(仮称・北海道大学附属図書館蔵、国立文書館所蔵図で補完)は、文化十四年(一八一七年)作製の間宮林蔵の複製図である。川名は、①イヌー川(※印は朱書で、幕府天文方の「川」の表記法である)、そしてその支流に②オン子ナイ、③イハヨマイヌーの二つが描かれている。

間宮林蔵の複製図から、伊野川は、「イヌー」と呼ばれ、知里真志保が書いたように、「ペツ」(pet川)も「ナイ」(nax沢)もつけなかったことが判明する。川名の由来は、山田秀三がまとめたように、「イヌン」(inu 狩漁期の仮小屋)で、「イノ」と訛り、ここでは、永田地名解のように、特に「漁人の仮小屋のある川」の意味であった。

(アイヌ語地名研究会幹事)
※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

113

高橋 基